



月と少女



shiarin

あの始まりは何だったんだろうとふと考える時、あたしの頭の中に浮かび上がってくるのはやっぱり月。キラキラしていてとても綺麗で、その輝きをあたしは忘れる事はないだろう。それが意味を失ったとしても。

あたしが、小学六年の時まで住んでいた古いマンションは決して嫌いじゃなかった。確かに古かったし、真四角でコンクリートの塊みたいだったし、壁の「B」（B棟）の字は剥げかかっていたし、欠点を挙げればそれはもう数限りなく出てくるような、そんなマンションだった。

その五階にあたし達家族は住んでいた。構成員はママとあたしとお姉ちゃんとパパ。あたしとお姉ちゃんは二つ違いで、この頃はまだ共同部屋の二段ベッド生活だった。ベッドの上はあたし。ここからの月の眺めは正に絶品だった。

学校のクラスでは公立中進学組と私立中進学組がほぼ半々の割合だったけど、あたしの場合私立、しかもトップレベルのS女子中を目指せる成績だった。担任もママも、あたしがS女子中に進学するのは当然と考えているようだった。そんな事でストレスをためて過食に走ったり、出口がない地獄だと悩んだりする訳ではなく、ただ一つ不安だったのは（お姉ちゃんと一緒に学校か）という事で、いつもシャーペンくるくる回しながらあたしはため息をついていた。

その夜もあたしは受験勉強にいそしんでいた。問題集のページの隙間にお姉ちゃんのいびきが入り込んでくる。机の上の時計は知らんぷりで秒針を動かすだけで決してあたしを救ってはくれない。

六畳の小さな部屋の中、あたしは勢いよく椅子を倒した。学習机から離れてくるり振り向き、ベッドの下段にあるでかい物体に拳を思い切りぶち込む。布団の上からでもぼすっと鈍い音がした。「死ぬ。」と小さく呟く。お姉ちゃんは起きなかった。ただ何故かいびきが止まったので、一瞬（本当に死んだ？）と思ったけどそんな事はあるはずもなく、またすぐにいびきは再開された。

「バカみたい。」

あたしはベッドの梯子を駆け上ってちらりカーテンを開いた。青白い月の光を前に深呼吸。目を閉じると夏の匂いがした。花火の終わった後のような匂いと、潮の匂い。ここから海なんて全然近くないのに、ほんの少しだけするのは何故だろう。目を閉じていると他の感覚が敏感になっていく。何だか面白くてあたしはそのまま一人遊びを続ける。あ、羽音。蚊だ。五階にまで飛んでくるとはしぶとい奴だ。ちっ、邪魔された。

窓を閉めて机に戻る。

^{あやか}
「彩夏。」

その声にあたしは全身を震わせ、一瞬で落ち着くと、

「はいっ！」

とすばやくドアを開ける。

「まだ頑張ってたの？」

ピンクのパジャマを着たママが、おにぎりを持って立っている。ふわりシャンプーの香り。くるくるウエーブのママの髪が揺れる。

「後、ちょっとだけと思って。」

「あんまり無理しないでね。」

「うん。」

おにぎりを受け取ってドアを閉めた。ママは、あたしがついさっきおねえちゃんにパンチしてたとは夢にも思わないだろうな。見ても、見なかった事にするんだろうなあと。おにぎりをもそもそ食べながら考えてみる。そういうのが得意な人なんだから、ママは。

「うー…ん。」

お姉ちゃんが寝返りを打った。おにぎりを食べ終えたあたしは思わずその姿をじっと見てしまった。

あたしと似てる所を探す。また一人遊びを始めてしまう。さらさらの髪質。耳の形。長い睫毛。以上。あたしの倍はありそうな体重や手入れの悪い肌や、似てない所は百も二百もありそうであたしはまた拳に力を込める。右手を強く握り締めたまま、ベッドの上に移動する。

月。月光があたしの真ん中を突き刺す。あたしの邪念を溶かしてくれる月。たいしたことない、くだらないよと言ってくれるような月。カーテンを閉めて、そんな優しい月を抱いて今夜も眠ろう。あたしは十二歳にもなってこんなおまじないごっこをしていた。多分、これが始まり、最初の月。

二番目に思い出せる月は、あたしの胸をちくりと刺す。
あの夜、台所から見たあの月。あの青白い光が、いつものあたしのベッドに注がれるモノと同じじゃない事を知った。

受験の天王山と言われる夏休みを必死で乗り切り、とにかく勉強ばかりしていたあたしに、ママは突然言い放った。

「システムキッチンなのよ。」

あたしの目の前にはカレーライス。今、塾から帰ってきたあたしは台所で一人、夕飯を食べてます。で、さっきの台詞がどうつながる訳？

「あのね、彩夏。」

ママは少女のようにもじもして体をくねらせたかと思うと、テーブルにぼんと手をつき身を乗り出して

「マイホームにお引っ越しするのです！」

と宣言。これはどうしよう？ ドラマみたいにスプーンを落としてみるか？ いい音するかな、このカレースプーン。だけど銀のスプーンをしげしげと見つめただけで、結局何もできなかったあたし。

スプーンからママに視線を移す。ママがこっちを見ている。でもあたしを見ているんじゃない。ママの瞳はあたしを飛び越え、時間も空間も飛び越えてはるか未来を映していた。ママにしか見えない未来を。

「陽の当たるリビング。いつも家族の笑い声あふれるスイートホームがあなたのモノに。」

ママは隣の椅子から五冊ぐらいの住宅カタログをテーブルの余白に広げ、もったいぶってその宣伝文句をそのまま読み上げた。

今の、笑うところ？

その後、ママはカタログの嘘くさいキャッチコピーを延々とお経のように読み続けるというシュールな行為に没頭し始め、あたしはというと、本当に間抜けなんだけどただただカレーを食べ続けていた。ママから発せられる途切れない声に対抗するように、あたしは規則正しくリズムカルにスプーンを口に運んだ。

あたしは何と戦っているの？ 何を拒否しているの？

ふっと顔を上げると目の前の椅子にママがいない！ ママは本当に自分の夢の世界に飛び立ったのか？ そんな訳はもちろんなくて、お風呂の方から

「食器下げておいてねっ。」

と楽しげな声が聞こえてきた。

「システムキッチン。」
ぽつり呟き、人参をころころ口の中で転がす。目の前の光景を眺めてみた。もう水しぶきの跡の
取れない流し台や、取れかかって補修してあるふきん掛け。とにかくそういうものがない台所が
それなのかなあとぼんやり思う。まあ今はカレーを食べよう。挽肉や玉葱、じゃがいも。ママの
作るカレーはやっぱりうまいとベタな事を思って、食べる事に集中していたからお姉ちゃんがす
ぐ横に立っている事に気づくのに遅れた。

お姉ちゃんとは冷蔵庫を開けて牛乳を手に取り、ラップ飲みを始めた。小さなこの空間にごくん、ごくんという不気味な音が不思議なくらいよく聞こえてきた。

「汚い。」

「そう言う」と、

「大丈夫、全部飲んじゃうんだから。あんたも早くカレー食べちゃいなさいよ。」

と、的外れな答えが返ってきた。その瞬間、あたしは吐きそうになった。

「何であたし、カレヘーなんか食べてるんだろう？　何でお姉ちゃんと同じ場所で同じ時間に同じ行為をしてるんだろう？」

何でお姉ちゃんここに居るの？　何であたしのお姉ちゃんなの？　ねえねえねえねえねえねえ
ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ！

吐きたい衝動と水と殴りたい本能と一緒に、一気に噴出した矛盾だらけの疑問を飲み込んだ。

お姉ちゃんは空になった牛乳パックをごみ箱に捨て、あたしの方を見た。

「何。」

体の底から声を絞り出したあたしに

「ウチ、最近アブナイの知ってる？ ママが馬鹿げたマイホーム症候群にかかっちゃったからさ。最悪離婚かもよ。」

そう言ってにっと笑ったその顔は本当に醜くて、またあたしは拳に力を込めなきゃならないのだ

「問題はお金よお金。あの人、三十六にもなってそういう現実がわかんないんだよねえ。は一あ、まあ着てるモノとかからして歳相応じゃないもんね。求める方が無理か。大体…。」

「分かったから！」

あたしは勢いよく立ち上がった。椅子が後ろに倒れて音がした。駄目だ、まだママが起きてる。

「やだどうしたの？」

お姉ちゃんが椅子を元に戻した。

「駄目だよ興奮しちや。あんたは今一番大事な時なんだから。ね、おやすみ。」

去っていくお姉ちゃんの後ろ姿がやけに大きく見えた。(元々体はでかいんだけど)

あたしは大人しく食器を流しに運んだ。正面の小さな窓から月が見えた。

初めて見たくないと思った。月はやっぱりいつもと同じで美しく、だからこそ怖いと初めて感じた。ここのところ勉強にばかりかまけて観察してこなかったウチの力関係の事もあたしの奥に潜む何かこの光が全部照らし出してしまいそうに思えた。

そんな事しなくてもいいんだ。あたしの月はただ、あたしんちの影を、あたしの闇を真っ白に埋めて欲しい。それだけを願っているのに。

その望みがどんなに都合がよくて大それたものかという事に、この頃のあたしはまだ気づいていなかった。

もちろんわが橘家は離婚もせず、あたしもS女子中に合格。（まあ大人の事情はいろいろあったらしく、たまにパパとママは夜中ひそひそ話し合っていたみたいだけど、それと離婚は別だ。少し考えれば分かる事じゃないか。）入学のタイミングに合わせて引っ越しは行われた。

その日。ママの夢が叶った大切な日なのに、何故だかあたしの記憶は断片的だ。大きすぎるトラックに隙間なく積み込まれた段ボール。業者の男の人が二人がかりで「せーの」と声を合わせて閉めた後ろの扉。パパの運転する車の中、あたしの隣でずっと飴を舐めていたお姉ちゃんの横顔。そんなどうでもいいコマコマばかりが脳の引き出しに入っている。車は予定通りにマイホームにするりと到着する。ママが車から降り立った。

その日のママは、淡いピンクのトレーナーにジーンズ姿ですっぴんだったのに、あたしが知ってるいろいろなママの顔の中で、第一位の美しさにランクインしている。マイホームの近くには桜の木なんてなかったはずなのに、一瞬桜の花びらが見えた気がした。それは桜があればママが一層輝くだろうと思ったからかな？

大丈夫かな、あたしの頭…と思っていると、ふいにママの柔らかな唇が動いた。優しい声が春風に乘って耳に届く。

「彩夏。合格おめでとう。」

その時、あたしの奥にしまわれた月が消えていくのを体で感じた。素直に驚いた。（もう大丈夫）何の根拠のない予感。あたしの真ん中を通り抜ける太陽の光。例え神様に禁止されていたとしても、初めて触れたようなぬくもりを、逃さないように壊さないように抱いてあたしは笑っていただろう。合格が嬉しいんじゃなくて引っ越しが嬉しいんじゃなくて…。

はじまったの？ 終わったの？ それすらわからない。これはきっとわからない事そのものが大事だと思い、この時あたしはこの「わからない事」に「幸福」という名前を無理矢理付け、自分の奥底にある月を捨ててしまった。

あたしの犯した過ち。だってバカだったんだもん。

入学式の日の教室で、あたしは前に座っている女子生徒の髪をずっと眺めていた。窓から入ってくる光はどんな顔を照らしているんだろう。無性に知りたい。

つまり、その時あたしはすでに彼女—瀬野^{まなみ}愛美に引き寄せられていた。だから、急に彼女が振り向き、はい、という透きとおった声と共にプリントを回してきた時には、間抜けにぼかんと口を開けていた。そんなあたしを見て瀬野愛美は笑った。慌ててプリントを後ろに回し、前を見るとまだ瀬野愛美はこっちを見ている。

予想通りの整った顔立ち。美人。左目下のほくろ。長くて自然に上を向いている睫毛。あたしは彼女の顔のパーツをすべて見逃すまいと必死になった。笑っていた瀬野愛美は、一瞬で真面目な顔になる。クラスでは自己紹介が淡々と始まっていて、あたし達二人は切り離されて別の場所にいるみたいだ。

「何でずっと私のこと見てたの？」

瀬野愛美は小声でそう言うと、口の端をわずかに上げて笑顔を作った。

「私、わかるんだ。見られるの慣れてるから。」

「…ごめん。」

負けた。何だかこの場では負けたという気になって謝りでもして誤魔化そうとしたら、

「いいよ。私、君になら一日中見られててもいい。橘 彩夏さん。」

と彼女。自己紹介はまだか行なのに、瀬野愛美はあたしの名前をはっきりと口にしました。

「君、可愛くて目立ってるから。最初に渡された名簿で真っ先に名前確認したんだ。可愛いね、その幼顔。くせになりそう、レズとかじゃないけど。」

あたしは彼女の大きな瞳に（自分でもわかってるよね？）のメッセージを読み取った。だからもう、逃げも誤魔化しもしないで

「ありがとう、瀬野愛美さん。」

と言った。一瞬、二人の間の空気が止まって次の瞬間、あたしも彼女も笑いをこらえるのに大変だった。

空が青からオレンジ、紺色にと色を順に移していくように、あたしと愛美は仲良くなっていった。

そう、すべては計画通り。正しく物事は進んでいった。第一ステージの学校生活においては、学級委員に愛美が選ばれ、クラスは自然にグループ分けされ、あたしは小学生時代と同じく一番目立つAランク組に入った。もちろん愛美も一緒だ。

不安だったお姉ちゃんの事も取り立てて聞かれる事はなかった。この学校に姉妹で通っている生徒は沢山いるのでいちいちみんな詮索しないのだ。自分の自意識過剰さにちょっと恥ずかしい想いをしたあたし。

第二ステージの家庭生活。この家に引っ越してきて一番嬉しかったのは個室を与えられた事だった。マイルーム！もう月明かりの下、震える手でお腹を殴らなくてもいいんだと思うと、神様を信じてもいい気持ちになった。ついでにテレビも欲しいとねだったが、それは頑として受け入れられなかった。

「駄目、絶対。テレビは家族揃ってあの素敵なリビングで！」
ママのこの声の力強さに逆らえる者などいる筈もない。リビングはあの「システムキッチン」とつながっている。今、そのリビングに並ぶママのパッチワーク群。

ママのパッチワーク。これをその辺の主婦の趣味だと侮ってはいけない。もちろん上手い。でも重要なのは上手下手の問題よりも熱意というか、怨念とでも呼べそうなミシンを動かす時のママのあの目だ。マンションの505号室に、鼓動のように途切れることなく響いていたミシンの音。他のものはすべて捨ててきたのに、ママはその音だけをマイホームに持ち込んだ。マンションで作っていたのは鍋つかみ、鍋敷き、ドアノブカバーなどの小物で、それはそれは可愛らしいパステル調の色で彩られ、きれいとは言い難い台所をさらに安っぽく感じさせてしまっていた。それが今やマイホーム。もうスケールが違います。いきなりテーブルクロス、ソファカバー、果てはカーテンまで作ってしまいそうな勢いです。本当にウチのミシンは働き者です。素晴らしい！（このママのパッチワーク熱が勢力を増し、実は元々帰りの遅かったパパをさらに遠ざけさせてしまった、間違いない。さらに言えば、この事実気づいているのはこの家の中でパパも含めてあたしだけ、間違いない！だからと言って優越感も何もありません。）

弁当箱の蓋を開けると、鶏の唐揚げに赤や黄色の串がたくさん刺さり、ウインナーはたこさんウインナーとなって唐揚げと一緒に仲良く並んでいた。
「わっ、あやっぺのおべんと、いつもおいしそうだねえ。」

こう言って隣から身を乗り出して覗き込んできたのは、愛美ではなく津田瑞希^{みずき}だった。
「いいよね、あやっぺのママはかわいいお弁当作ってくれてさー、ウチなんてほら見てよこれ。」
と言って津田ちゃんは自分の弁当箱を見せた。きんぴらごぼうや煮豆の汁でご飯が茶色くなっている。

「まずそうー。」
そう言いながら箸を乱暴に動かし、がつがつと食べ始める。
津田瑞希。正直、四月はノーマークの生徒だった。いや六月の今になっても何であたしの隣にいるのかは謎。あたしと愛美を「あやっぺ」「まなっち」と呼び、そう呼ばれる度に二人の間の神聖さが失われていくようで、いつもあたしは「津田ちゃん」と呼んでいた。津田ちゃんが邪魔かといえそうですがでもない。ただ津田ちゃんと一緒にいるのには、素肌にツルツルのレインコートを着たような違和感をいつもあたしは抱えていなくてははいけない。そのごろんとした石のよう

な違和感。それを他の方法で表現する術^{すべ}をあたしは知らないというだけ。
津田ちゃん。特に何ができる訳でもなく、不細工でも可愛くもなく、この間発表された中間試験のクラス順位は下から数えた方が早かった。いつから、あたしと愛美の間にどうやって居場所を作ったのか？ そんなあたしの疑問に気づくはずもなく、津田ちゃんはあつという間にまずそうなお弁当を食べ終え、
「ダイエット、ダイエット！」

と言いながら教室を出ていった。津田ちゃんはいつも一番にお弁当を食べていなくなる。
「ねえ愛美…。」
津田ちゃんの事を話そうとしてやめる。誰かがその場から消えたらすぐ悪口をたれる低俗な女だとは思われたくない。

愛美はあたしの話の続きを聞こうとせず、きれいな手の動きでご飯を口に運んでいる。視線をずらし、たった今津田ちゃんが出ていった教室の戸をぼんやり見ていると、Cランク組の四、五人の生徒が連れ立って教室の外に出て行った。

「あれ…。」
あたしはもう一度愛美を見る。お弁当を食べ終えた愛美は
「どうしたの？」
と微笑んだ。

「ねえ、あの、津田ちゃんってさ、松田さんとか下村さんとかのグループとも仲いいのかな？」
抑え目に、探るようにぼそぼそと言ってみる。

「さあ、それは瑞希にしかわからないよ。彩夏、気になるの？」
「ううん、別に気になるっていうか、何なんだろうな津田ちゃんはって思って。」

「素直だね、彩夏は。」
そう言ってリップクリームを塗りながら、愛美はあたしをじっと見た。いつものその大きな瞳が、今特別憂いを帯びているように見える。

津田ちゃんのその謎の行動の理由は、この会話の二、三日後に明らかになってしまう。

中間試験が終わったばかりの頃、あたしと津田ちゃんて愛美の家に遊びに行った。津田ちゃん

は「すげー、まなっちの家すげーすげー。」

とやたらうるさくてあたしと愛美は笑った。愛美の家は本当のお金持ちの家だった。洋書の並ぶ大きな本棚やシャンデリア。この時、あたしの脳裏を何故かママの笑顔がかすめた。

これはママが望んでも手に入らないモノだ。あたしの笑いはそういう意味も含んでいた。

「ウチなんて団地だよーダンチ。お母さんずっと引っ越したい引っ越したいって言っててさー、あんたの学費だって生活切り詰めて出してるんだから、中間悪かったら承知しないとか言いやがんの。あったし激ヤバなんすけどー、うー助けてまなっちー、あやっぺー。」

「あはは。」

あたしの笑いがどんどん乾いた声になっていく。津田ちゃんの家に行った事はないけど、そのダンチという言葉の響きがああ505号室を思い出させる。今あたしの瞼の裏に映るモノー安っぽい台所、二段ベッド、窓から見える月、月の魔法を信じていた自分ーもうみんな捨てたモノだ、ごくりとあたしは唾液を呑み、そう自分に言い聞かせる。そんな頃の自分を津田ちゃんが知る筈もないのにすべて悟られた気になって、必死に頭の中でその考えを打ち消した。

「いいなーいいなーまなっちはー。」

出されたショートケーキをぱくぱく食べながら、津田ちゃんは遠慮なくリビングを見回す。

「別にそんなよくもないよ。」

愛美がぼろっと言った。

「何で何で何で一っ？ ありえないよ、こんな広くていい家住んでてぜいたくだよー、ねー、あやっぺー？」

津田ちゃんが突然あたしの肩を抱いたのでギクリとして体がこわばった。津田ちゃんはやたらとスキンシップをしたがるのだ。津田ちゃんと二人で「いいなー」を連発する気にはとてもなれないので、曖昧な一人笑いを続けていたら、愛美が紅茶をかき混ぜながらあたしだけを見ていた。それに気づいた。救われた気がした。事に気づいた。

愛美の家から最寄り駅までは一本道。お婆さんがでっかい犬に引き摺られそうになりながら、よろよろ坂道を下っていく。その様子を面白いなと見続けたせいで

「あやっぺ、いつなら大丈夫？」

と不意打ちをくらった。

「え？」

「もー時々ぼんやりなんだよなーあやっぺは。可愛いのにコノヤロウ。」

津田ちゃんが体当たりをしてきて、あたしは不恰好に前につんのめった。殺気めいた眼差しを向けようと振り返ったら、夕陽のオレンジがとにかく眩しくて失敗した。津田ちゃんの笑い声だけが掠れて耳に届く。

「いつって何が？」

「だから、あやっぺの家に遊びに行く日だってば。」

「はあ？」

「まなっちの家の次はあやっぺの家でしょうー？」

当然のように言われ、めちゃくちゃ動揺しているあたしに自分でびっくりした。

「そうなの？」

えへへ、と笑ってみる。ああ、こういう展開を予想できなかったのは何故？

「津田ちゃんちは？」

「えっ？ 何言ってるの？ だーめだめ、見せられないよー。あやっぺとまなっちに友達やめられたくないからさー。」

津田ちゃんはあたし達二人の真ん中に割って入り、がばっと二人の肩に両腕を回した。ずしりと重みが上体にのしかかる。

「う。ウチもさー、そんな愛美んちなんかと比べられたら。」

「行きたいな。」

愛美が夕焼け空を見上げて言った。

「彩夏んち行きたーい。」

「……。」

「ほーらー、まなっちもこう言ってるじゃんかー…。」

津田ちゃんがいろいろ喋ってたけど、あたしは無視して足元に視線を落とした。小さな石ころを蹴飛ばしたら、そいつはころころと軽快に坂道を下っていった。

あたしのおウチ＝ママのお城。今、咄嗟に「恥ずかしい」の単語が思い浮かんでしまった。もう月なんてあたしの中から消した筈。でもまた月を思い出しそうな自分がここにいる。何で愛美はあんな家に住んでいながら、ウチに来たいなんて言うんだろう。

「やだ、あやっぺ泣いてるの？」

ずっと下を向いてたら、何だか弾んだ声で津田ちゃんがこう言った。アホか。

「泣いてるかバカ！」

鞆をぶんと振り、思い切り津田ちゃんにぶつけた。

「やだーマジになんなよおー。」

そのまま坂道を下りながら、珍しく津田ちゃんと二人じゃれ合った。こぼれた涙は石ころのように風と一緒に吹かれて消えた。

津田ちゃんの提案はすぐに実行された。

「すげーすげーすげーあやっぺんチ！」

ウチに来た日もやっぱり津田ちゃんはこれだ。

「このソファカバーすごい。わ、触っているとほら、幸せが伝わってくるよ。」

津田ちゃん、アンタ将来安泰だな。そうだよな、世の中はそうやって渡っていくもんだよな。何とはなしに天井を向いてママの手作りクッキーをあたしはかじる。

「ねえ彩夏、ソファカバーもテーブルクロスもこのクッキーもケーキもママの手作りなんだよね？」

愛美が確かめるように聞いてきた。

「うん、そうだけど…」

愛美がずっと表情を変える。お、あたしの好きなこの真面目顔。長い睫毛の落とす淡い影にいつもあたしは魅了されてしまう。

(…!) 次の瞬間、あたしはクッキーを口の中に放り込み、スリッパをぱたぱた鳴らしてリビングを出て行く。

お姉ちゃんが二階から降りてきたのだ。生まれつきのあたしの敏捷性に感謝！ 階段からリビングに続くドアの前、ぎりぎりセーフ。

「友達が来てるから。」

呼吸を整えながら言ったあたしに

「へえ、どんな子達なの？」

と言いながらでかい腹であたしをドアに押し付けてきた。どうでもいいだろ、と思いつつ「いい子達だよ。」

と答える。

「牛乳飲みたいんだけどなあ。」

「もうちょっと待ってよ。」

十分に呼吸ができず、切れ切れに言葉を返す。

「んふふふ。」

笑ったお姉ちゃんの鼻息が顔にかかる。臭い。睨みつけると、丸い顔をさらにばんばんに膨らまし、鼻の穴を全開にした最高に楽しそうで不気味な顔がそこにあった。気づいたらまたあたしは拳を握っていた。

「ま、いいわ。ごゆっくり。」

そう言ってお姉ちゃんはあたしから体を離し、二階に上がっていった。ゲームクリアー！ 勝った！ 快感に酔いしれてドアを開けたら。

そこにママがいた。カウンターキッチンの中から飛び出しソファに座っているママ。

「あ、彩夏一、何やってたの？ あのね、ママね今すごい事聞いちゃったの。」

何だ何だこのテンションの高さは？ 津田ちゃん並だ。

「瀬野さんのお父様、出版社で編集長なさってるんですって？」

「え？」

何だ。ついさっきどういうやりとりがこの場で展開されていたのだ。愛美がすらすらと説明する。

。「あの、この橘家取材したいと思って。月刊『ホームメイド』って知ってる？ キルトとかアップリケの作り方を載せてる雑誌。このソファカバー。作りもすごく丁寧だし、色や柄のセンスもいい。ホームメイド大賞っていうコンクール、年一回やってるんですけど、それも取れそうなレベルなの、これは。」

まるでプレゼンのように愛美は熱心に話している。

「もちろん、そのエプロンも手作りですよ、アクセントのボタンがとってもいいですよ。」

ひたすら褒める愛美。

「やだ、そんな。」

やたら照れるママ。愛美は何がしたいんだろう？ あの、夕空を見上げて呟いた「行きたいなー」の一言が、まさかこんな事態を生むなんて。すげーすげーすげー…また津田ちゃんが連呼している。多分、お姉ちゃんは二階でお菓子を食ってる。

あたしは…どこにも入れない。初めて味わう感覚だった。自分の立っているフローリングの床からひしひし冷たさが伝わってきて、それはあつという間にあたしの体中を駆け巡った。寂しさにも似た、けど少し違うこの感情。自分の足元がゆらゆら揺れているこの感じ。こんな気持ちは誰にも見せちゃならない、きっと悟られてはいけないモノだ。不可解な自分自身の感情にきつく封をして閉じ込めた。

『ホームメイド』取材の日は家にカメラマンさんと、後何人かの人に来て、

「あ、娘さんとのツーショットの絵なんか欲しいですねー。」

なんて言われてあたしも写真を撮られた。お姉ちゃんは部屋から一步も出てこなかった。そんな一日はすぐに過ぎた。掲載は数ヶ月先の号になるらしい。

忘れられない一時がある。そこに月はない。月の喪失が際立っているから、ある意味一つの「月」に関するモノだともいえる。

とある日曜日、何となくみんながリビングに集まった時があった。ちょうど陽射しが窓から入る時間帯（カタログには『南向き、採光性抜群』と書いてあったんだけど、近くの文化会館とかいう五階建てのビルのせいで実は一定時間しか陽は射さない）、起き抜けのあたしはパジャマ姿でいつものホットミルクを飲んでいて。カップの中に、うっすらと自分の影が写る。珍しく、お姉ちゃんもその朝は一緒にいて何とパパまでいた。すごい、と無表情であたしは思いながらカップに口をつける。パパは「失敗した」みたいな顔で新聞を開いたり閉じたりしながら、居心地悪そうにソファに座っていた。コーヒーを一口飲んで、向かいのソファに座っているあたしに話しかけてきた。

「あ…あ。」

まさか「彩夏」が出てこない？　そう言えばパパに名前を呼ばれた記憶がここ最近ない。

「なあに。パパ？」

優しいなあ、あたし。自分からこう言ってあげる。

「学校は、どうだ？」

「楽しいよ、とっても。いい学校だね、ね、お姉ちゃん。」

あたしの隣でココアを飲んでたお姉ちゃんはまずびくくとして、次にしゃんと背筋を伸ばし首だけ縦にぶんぶんと振った。この仕草に笑わなかったあたしにプラス十点。ママはカウンターキッチンの奥からあたし達を見てた。穏やかな笑顔で。

カレーを食べた日、あの月の夜。二番目の月を思い出した。カレーを必死に食べていたあたしの向こうにママが見ていた光景はこれだ、と妙に確信してしまった。まるで自分が、世界中の謎を解いた哲学者にでもなった気がした。さらにそんな自分の愚かさを愛しいとすら感じた。あたしが「パーフェクト・ホーム」と名づけたこの一時はずっと、あたしの中に眠っている。

梅雨に入った。控えめだったり乱暴だったりする雨音があたし達を包む頃。

「次は津田ちゃんチでしょー？」

その日、あたしは何だかハイだったのだ。

「えーだから言ったじゃん。まなっちとかあやっぺとかと違ってウチ売りが何にもないの。しょぼいダンチなんだから。」

津田ちゃんはまだ笑顔だった。

「うわー何それ、ずるいずるい自分だけ。」

津田ちゃんは、また必死にお弁当の中身を胃の中に掻き込んでいる。

「無視すんなって。」

調子に乗ったあたしは津田ちゃんの机を押した。ちょっと勢いをつけて。ガタン、と音がして中からノートが二、三冊パタパタと落ちた。その瞬間、津田ちゃんの顔からさっと血の気が引いて一冊を抱きかかえるように机の中にしまった。

「あっ、今の何なの？」

調子付いたあたしは止まらなかった。

「何でもないよ。」

「ウソーやだー、見ーせーてー。」

津田ちゃんの机の中に素早く手を入れ、一番上のノートを引き抜いた。表紙には「純愛ノート」と太いマジックペンで書かれてある。中を開いてみた。

『○月△日 二時間目の数学。待ちに待ったこの時間。谷サマの今日のストライプのネクタイ。あれは奥様の趣味かな？ いやいや谷サマは独身。私達の永遠のアイドル。

洋服の青山でセール品の525円であのネクタイを買って、セブンイレブンでカツカレー丼とアミノサプリを買って、ついでにツタヤでAVを借りてきた。昨日はこんな感じだったんじゃないかなー？

メグにタッチ！』

『カズ、甘い！ 今日の谷ちゃんをよく観察してなかったでしょー？ ひ・げ。

ちょっと残ってたぞ。それでそれで、あたしの机の横を通る時、かすかに感じたあの匂い。香水だ香水。ほんのちょっとだったけど絶対にしたんだから。つまり、谷ちゃんは昨日帰ってない。ひょっとしたらフーズク帰り？ うわー、鼻血出そー！

ということで、谷ちゃんはどんなセックスをすると思う？ 一番肝心な所をミズキちゃんよろしくお願いだっちゃ！』

ノートはそこで終わっていた。笑わなくちゃ、笑ってバカにしてやらなくちゃ津田ちゃんの事を。さあ、どうした彩夏。顔の筋肉がぴくりとも動かないぞ。

「あーあ、ばれちゃった。こわって思った？」

ノートをあたしの手から取り上げ、白い歯を見せて津田ちゃんはにっと笑った。痛々しかった。

「谷サマって、あの数学の谷先生の事だよな。」

谷先生は、二十代後半の数学担当で、銀縁眼鏡を掛けたかつこよくも何ともない男だ。というかこの学校の先生は全員そうだ。飛びぬけて不細工な奴はいても飛びぬけていい男なんかいない。

「うん。他にいないでしょ。ただの妄想。暇潰しなんだよ。」

「何で…谷先生なの？」

「別に。誰でも良かったんじゃない？ 誰かがやろうって言い出したらもう止まなくなっちゃって。ほら、カズー松田さんとか下村さんとかは、あやっぺやまなっちにならわかんと思うけど、男子に縁のない生活してきて、それで今女子校でしょ？ みんな何かこう、溜まってるっつか、ウチら下っ端組だからイジメとかもできないしさ。むしろされる側だし。」

お弁当の蓋をパチンと閉めて、あたしの方も愛美の方も見ないで津田ちゃんは喋り続ける。

「あたしは二人とは違うから。あやっぺもまなっちもタイプは違うけど可愛いし、頭いいし、違うんだもん全部。この学校だって受かったのまぐれだって親にもさんざん言われたし、自分でもそう思ってる。才能の有無なんて十代でわかるもんだよ。」

あたしは…あたしは二人といて、二人の間にいて誇らしかった。同じかもって錯覚する瞬間もあったから。でもメグやカズと一緒にいる時の方が、正直居心地良かった。それでもあたしは、あやっぺとまなっちが大好きで憧れてるから。」

あたしは愛美を見た。大好きな、あの真面目顔で津田ちゃんの話をしている。

「あたしの事、ヤバイって今思ってるでしょ？ こんな妄想リレー、ノートに書いてバカだなんて思ってるでしょ？ えへ。でも書くよ、あたし。谷サマのセックスを精一杯妄想して。」

さてと、それでは行ってまいりますか。あ、あやっぺさあ、気にしてたでしょ？ お弁当あんなに早く食べてその後あたしがどこへ行くのかって。背中にいつもあやっぺの視線感じてたよー、嬉しかった。こういう事だったんだよ。謎はすべて解けた？ メグやカズ達とノート交換してるんだ、秘密の場所で。その場所は内緒。ま、知りたくもないだろうけどね、じゃっ！」

また、津田ちゃんの出で行った先をあたしは見つめている。見抜かれてた。何もかもが。

津田ちゃん。あたしは彼女の名前を胸の中で連呼する。三人の間のバランスは、きっともう取れない。季節が移ろいゆくように、風が流れるようにはきっともうあたし達、進んでいけない。アンタが禁句を口にした。掟を破った。

そこであたしは気づいたんだ。津田ちゃんの秘密とやらは、あたしにとって本当にどうでもいい事なんだ。それなのに今、ここで津田ちゃんに同情しそうになっているあたしという人間は、きっとものすごく傲慢なんだろう。

うん、それはわかっていた。

「彩夏。」

制服の裾を引っ張られた。愛美の真面目顔は、やっぱりあたしの一番好きな顔。

「私の秘密、共有しよう。」

キレイな声

「う——ん！」

青い空と白いコンクリートの世界。愛美が両手を上げて伸びをすると、薄いピンクのタンクトップがちらりと見えた。

「今日はラッキー、屋上の扉開いてたね。」

朝まで続いていた雨は上がり、愛美とあたしの髪とスカートは強風にはためき、梅雨の合間の陽光を浴びていた。

「屋上、いつも開いてる訳じゃないの？ あたし初めて来たから。」

「管理人さんがね、週交代で二人いるみたいなの。で、そのうちの一人が忘れん坊さん。」

銀色の柵がギラギラ光って眩しい。

「ほら彩夏、こっちおいで。」

愛美がこんなにはしゃいでいると、あたしまで何だか嬉しくなる。二人で柵にもたれて死体のようになっている。

「こうしてると干からびそうだね。」

「女子中学生、干物になる。」

意味不明の会話であたし達は笑う。嘘みtainな青空が広がっている。

「ウチねえ、パパが浮気しててさ、もう五年くらいになるかなあ。今、ママもパパもほとんど家にいないんだけど。ママは最初おかしくなってパパの服切り刻んだりとかしてたけど、それももう随分昔の事、気をつけてないと忘れそうなくらい。」

ママは私にパパの悪口しか言わなくなって、私が聞きたくないって言ったら、もうママとも話す事なくなって。ウチ、ホテルみたいなんだ。早くチェックアウトできればなあ。

パパはたまに会うと、私の言うことは何でも聞いてくれるの。おいしいものも食べさせてくれるし、彩夏の家の事も絶対載せてくれるって思った。

こんなの安っぽすぎてかっこ悪くてずっと話せなかった。さっき瑞希はあんな事言ってたけど、あたしだって瑞希とそんなに変わらないよ。

私が彩夏の家に行きたいって言ったのはね、だからなの。どう伝えればいいのか？ 彩夏の…そう、彩夏のお弁当！ 可愛くて可愛くてママが愛情込めようと頑張ってる心意気が伝わってきたの。私のお弁当っていつもお手伝いさんが作ってるから。無性に羨ましくて悲しくて悔しかった。君はどんな家で育ったんだろうっていう、ただの下世話な好奇心。

それで行ってみたら、思った通りの家だった。ママは何だか少女みたいで、幸せの部屋っていうのがもしあるとしたら、きっとこの部屋だと思った。自分の家が無理なら、せめて彩夏に、大好きな彩夏に私の理想を実現してもらいたいって勝手に思っちゃった。だから、本に載せて形にして、いつでも私が見れるようにしたいと思った。

私は彩夏じゃないのにね。余計、辛くなるかもって思ったけど、それでも見たいと私は願った。私の近くにこんな素敵なおウチがある。それは絶対、ちゃんと存在し続けるんだって思えば、私はあんなウチで愛されてなくてもどうにでもやっていける。そういう気がした。

ごめんね、彩夏の事を利用したのかもしれない。でも信じて。私は彩夏の事が大好き。

大好きなんだよ。」

「下世話な好奇心とか、かっこ悪いとかそんな事、二度と言わないで。」

あたしは愛美を抱いて言った。愛美の体が小刻みに震えている。少し背の高い愛美の顔を見上げると、泣いてはいなかった。嬉しかった。その綺麗な桜色の唇にくちづけしたい、と思った。

美しいモノだけを見ていたい。愛美の睫毛と真っ直ぐな黒髪、白い頬。あたしの家のソファカバー、おいしいケーキとクッキー。それをみんな明るく照らしてくれる太陽。すべて抱きしめたい。閉じ込めて誰にも渡したくない。

あたしはこの時、人生のピークを迎えていたようだ。太陽は動き、地球も回る。そう、月だって回るのだ。

それはいつもの月曜日の朝。愛美が「幸せの部屋」と名づけてくれたリビングにいつもの朝御飯が並んでいた。ママがお姉ちゃんを起こしに行く。あたしはいつものホットミルク。幸せの味

。「お姉ちゃん、どうしたの？」

ママの声がここまで届く。（ママはあたし同様、奴の事を「お姉ちゃん」と呼ぶ）何だろう。あたしは階段を上がってママの側まで行く。

「ああ…彩夏。」

ママはお姉ちゃんの部屋の前で立ち尽くしていた。

「お姉ちゃんがドアを開かなくしちゃっているの。」

「へ？ 何それ？」

理解不能。ドアノブを引っ張る。開かない。ロープか何かで固定されているようだ。

「ねえ彩夏、どうしよう。」

「ママ、落ち着いて。」

「こんな事、今まで一度だってなかったのに、一度だって…」

「だから落ち着いて。」

あたしは自分に言い聞かせるようそう言って階段を見下ろす。あのリビングはすぐそこにある。だから、昨日と同じ今日は絶対にある。頭の中に、あの日の「パーフェクト・ホーム」描いて。きっと大丈夫。

「おねえーちゃあーん？」

ドアを叩きながら叫んでみても返事はない。よし、強行突破。思い切り力を込めてドアを引っ張るとちょっと開いた隙間からお姉ちゃんの片目が見えた。一重のその目の光は鋭く、感情は読めない。

「ねえ何してんの？」

あたしは二重の目を合わし、聞いてみる。

「突然、何な訳？ 学校遅れるじゃん。」

「何が『今まで一度だってなかった』だよ。そんな事が何だっていうんだ。未来は誰にもわからない。」

「はあ？ バカな事言っていないで、さっさとドア開けてよ。」

「バカなのはお前らだ。」

そこであたしは、ある重大な事にやっと気づく。

「パパは？」

そうだ、こういう時こそ数少ないパパの出番じゃないか。うん、いくら家庭に無関心だからってこれはもう、パパにおまかせでしょう。

「ばあーばあーっ！」

いつも家ん中のどこにいるのか分からないので、あたしは大声でパパを呼んだ。パパはものすごい勢いで階段を上ってきた。正義の味方、かっこ良く参上…という訳にはいかなかった。どうやら髭を剃っていたようで、シェービングクリームが顔に付いたままだ。

「ばっかっ！」

いきなり怒鳴られた。（？）頭の中が真っ白になる。あたしかよ？ あたしに怒ってるのかパ

パは？ 何故に？

「大きな声を出すな！」

そこじゃないだろ？

パパの大きな肩が上下に動いている。こんな階段上がっただけで、おじんくさ。いろいろな言葉たちを頭に浮かべては呑みこんでいくだけのあたし。

「何があったんだ？」

「お姉ちゃんが出て来ないのよ。」

ママがすするようにパパを見た。

「出て来ないって何でだよ。」

「そんな事わからないわよ！」

ヒステリックにママが言い捨てる。パパは、はあはあと息をしながら心底面倒臭そうに、ちっと舌打ちをし、

ドアに向かって呼びかけた。

ふうか
「楓夏、おい、楓夏。」

もちろん返事はない。あたしとママにできなかった事がこんなおっさんにできる訳ないのだ。
「お、お前卑怯な事するなよ。こんな、いい家に引っ越して何が不満なんだ？ なあ楓夏。言わなきゃわからんだろう？ 違うか？ 父さんの言ってる事間違ってるか？ そう思うならドアを開けて出てきて、正々堂々と反論しなさい。それが筋ってもんじゃないのか。」
パパは言い終わった後、どうだ、というふうにママとあたしを見た。

「卑怯なのはお前らの方。」

扉の奥から、パパに負けないぐらいの低い声がした。

「お、親に向かってお前とは何だ？」

パパは急に声を裏返らせて怒鳴った。さっきまでの超然とした態度はどこへやら。そんなハツタリなんかすぐに見破られるのに、それに気づかないのがパパのパパたる所以だなあ、うーん、ちょっとかわいいかも。こんな時だってのにあたしは笑いそうになる。

「こんな時だけ父親づらするんじゃないよ。私はね、私はみんなわかってるんだ。そうだよ、お前ら三人みんな勘違いしてんだよ。」

ゆっくりと、お姉ちゃんは喋った。

「何それ？ どういう事なの？ ママわからない。」

わずかな隙間に向けた、ママのハイトーンボイスが祈るように響く。

「大きな声を出すなど言っただろ。」

パパは視線を泳がせながら、そっとママの肩に手を置いた。けどそれは高速で払われた。行き場のなくなったパパのごつい手を、あたしはじっと見ているだけ。

「ねえ、ねえアンタ。そう、特にアンタ、涼子さん。」

涼子—ママの名前。そんな無意味な単語を何で使うんだろう？

「涼子さん、精神年齢いくつなの？ あんな悪趣味なもので部屋埋め尽くして満足して、あげくの果てに雑誌にまで載るなんて、あー信じられんわ。」

「え？ ママの何が悪いの？ あのソファカバーが、テーブルクロスが悪いの？ わかった、わかったわ楓夏。ママやめるから。みんなやめるから。」

信じられない。ママからあれを取ってしまったら…いや、やめないな。あのミシンの音はママの心臓の音と同じだもん。ここでやめるって言ったって人はそう簡単に死ねないもんだ。

「ねえ、涼子さん。私が言ってるのはさあ、涼子さんの趣味の問題だけじゃなくて、そういう一つ一つのこと以前。涼子さんの人間性について…」

一体、お姉ちゃんの体のどこにこんなに沢山の言葉達がしまわれていたんだろう。ママを批判する単語はすらすら出てくるし、ママは泣きながら頷いている。

動けないあたし、そしてパパ。この家のこの瞬間、パパと一くりにされてるのがたまらなく嫌でみじめで大げさにため息をついてみる。と、パパも同じくため息。お互いちらっと見て目が合って最悪。

「ねえ、ねえ、お姉ちゃん。ママ何でも言うとおりにするから、ここ、開けてくれない？」

「だからそういうことだけの問題じゃなくて…」

ママとお姉ちゃんの押し問答はまだ続いている。あたしは何もできなくてやるせなくなつて、そのうちただただ不毛な気分がむくむくとわきあがってきた。

「台無し」

頭の中に浮かぶはこの単語。この家、みんな台無しになったんだって思った。こんな日がいつか来ると実はわかっていたような、でも絶対に来ないと信じていたような、変な気分。

すぐ側のリビングへと続く階段は今、地の果てにまでつながっているように思えて、その終わりはあまりにも遠すぎる。いつその事、あたしはどこまでも転がっていきたくなくなった。

梅雨があけ、窓の外に夏が来て、あたし達は夏休みに入った。蟬の鳴き声があたしの苛々を倍増させている。

お姉ちゃんは引きこもりになった。「登校拒否」がプラスされなかったのは、タイミングの問題で、休んだのが三日間だけだったからだ。この頃、ママはまだおいしい朝食を作ってくれていた。あたしの大好きなホットミルク。

お姉ちゃんの食事方法はかなり特殊なものになった。笑っていいもののオープニングがリビングに流れ始めると、二階からドアを蹴飛ばす合図音が鳴る。ママはカウンターキッチンの中にいて、ぼおっと枯れかけた観葉植物の葉っぱをなでているだけなので、仕方なくあたしがドアの前まで行く。ドアの間、数センチの隙間から丸っこい指と小さな紙切れが差し出される。汚いものでも触るようにあたしはその紙切れを受け取る。お姉ちゃんの鋭い眼光があたしを突き刺している。

「ごま塩おにぎり、ミニ炒飯、高菜弁当、デミグラスソースのオムライス、カツカレー、ツナマヨおにぎり、焼きそばパン、チョコレートホイップ…」紙切れにはこんなふうに食べ物の名前が汚い字でびっしり書かれている。これをママに見せるとお金を渡される。あたしは近所のコンビニに大量のお弁当やおにぎりを買に行く。帰ってくると、またドアの隙間からビニール袋をお姉ちゃんに渡す。潰してちゃんと入るようにしてから。

しばらくすると、弁当の蓋を開ける音、ご飯を掻き込む音がドア越しに漏れてくる。気持ち悪い。その音は小さいのに、今このしんとした家の中では何十倍にも響くようだ。いや、響いているのはあたしの頭の中だけなのかもしれないが。

ミシンの音、ママの鼓動は本当に聞こえなくなった。家が死んでいる。死んでいるのに、がん細胞のようなあの部屋だけは不気味に活気付いている。

あたしはママ相手に一人で喋っていた。

「今年の夏、すごく暑くなりそうだって。テレビで言ってた。ね、ね、やだな一暑いのに。」

夏かあ、あつ、ねえ何年前かなあ？ 家族で伊豆に行ったよね。」出てくる話題は天気や自分でも忘れていた小さな頃の事ばかり。うっとうしい親戚のおばさんみたいだ。ママは何も言わない。ママの目はあたしを通り越して遙か先を見つめている。いつかも見たとその顔。喋りながら全く違う事をあたしはママに問いかけている。

（ママの見つめる先には何がありますか？ あたしにも見えるものですか？ そんな未来の家がまだどこかにあるというんですか？）

今のあたしは誰かを思わせる。そう、それは津田ちゃん。駄目だ駄目だと思えば思う程、自分が津田ちゃん状態になっていくのがわかる。ママは津田ちゃん状態にはなれないタイプだから、二人でこの家を生き返らせるのは無理だろう。仕方なく、これは「一人津田ちゃんごっこ」なんだという事にした。こんなつまらない遊びをやってるだけなんだ、あたしは。

津田ちゃん。君の気持ちようやくわかってきたよ。別に一生わからなくてもよかったんだね。

そんな感じで一週間が過ぎる頃、ママの体が徐々に動かなくなっていく。カウンターキッチンの中、小さな椅子に座って口をゆっくり閉じたり開けたりしている。まるで死にかけの金魚のようになっていった。観葉植物は完全に枯れ、生気を失った葉をだらりと垂らしていた。

あたしのご飯も三食コンビニ弁当になった。ママの分も買ってくるのだが、ママはほとんど食べないのでこの暑さでそれはゆっくりと腐っていく。嫌なおいがリビングに充満し始めていた。

あたしはどんどんコンビニマニアと化していった。新しいお弁当が登場するのは毎週火曜日で、そして何種類かのお弁当が入れ替わりで消える。決まった時間がくると、売れ残ったパンやお弁当がかごに入れられて廃棄される。その定時まであたしは覚えてしまった。

リズム。決まったリズムで動いていく場所や人間。この頃のあたしは、そんな当たり前のものに飢えていたのだ。うちの中には干からびたママとリビング。そしてがん細胞。

八月の頭に「ホームメイド」が郵送されてきた。橘家は二ページの見開きで載っている。ぼんやりと一人で眺めてみた。これはきっとあたしだけにしか見えない家なんだ。カラフルなソファカバーも甘いクッキーもママとあたしの笑顔も、今は全部が夢のよう。パパがいた事さえも。

そう、パパの姿はあの日、あのお姉ちゃんが引きこもった日以来見ていない。とうとうパパはこの家を捨てた。いや、捨てられたのかも。どっちでも同じ事だ。ママもお姉ちゃんもその事実には気づいている訳はないので、あたしがパパの存在した事だけは証明しよう。別にどうでもいいけど。

ママが家事を放棄しているので、あたしがろくにやったことのない家事をした。洗濯機に服を入れ、適当に洗剤を入れて回し、乾燥機で乾かした。何枚かの服は型崩れしたり縮んだりして着れなくなった。無事だった洗濯物を丸めてソファの上に置いたら、一斉に埃がキラキラと舞った。そんなものすら綺麗に見える。

八月の十日過ぎ、「このままじゃいけない」とようやく思ったあたしだった。思ったのはいいけれど、何をすべきかは全くわからずリビングをぐるぐる回ってまた埃をたたせていた。

そうだ、外に出よう。唐突に思った。夏休みに入ってからコンビニと家の往復しかしていない。そうだそうだ、外に出よう、というか出たい。欲求はむくむくと膨れ上がりあたしを呑み込む。それはただの現実逃避だと知っていながらも、何か見つかるかも知れないという安易な考えに基づき、テーブルに置きっぱなしのママのお財布からお金を抜き取ってあたしは扉を開けて飛び出した。

真夏の太陽が照りつける中、最寄り駅までの徒歩十五分は地獄。ガラガラの私鉄に乗って渋谷まで二十分。人の流れに揺られてスクランブル交差点を斜めに渡り、突き当りのビルの二階のカフェでアイスココアを飲む。カウンター席から見下ろせば、ついさっきまで自分がいた地面にうごめく黒い点々が見える。みんなあたしの事なんて知らない。あたしは何をしてもいい。こんな空間にいるのは久々で、すごく自由で、何でもできるなんて錯覚を起こしそうな程。あたしの抱えてる事の大きさが計れなくなる程。

アイスココアは絶品。ポケットの中の携帯が震えた。

「やほー、あやっぺ、元気？ メールしてもゼーんぜんかえってこないんだもん。何してんの？」

津田ちゃんからのこのメール、さあ何て返しましょうか？ どんな答えを返しても、きっとあたしは携帯を閉じた瞬間、泣きそうになる。今までいたあたし達の世界はあまりにも遠くて、手すら伸ばせない。それでもあたしはこの場所から動けない、今。

終電の時間を過ぎててもあたしはまだセンター街をうろついていた。時間がたつにつれ、この街の荒れ果てた感じはウチに似ていると思い始めていた。

昼間はオシャレなカフェの前に山と積まれたゴミ袋。掛けられているブルーの網。

時々どこから奇声が聞こえてくる。恐怖とも歓喜とも取れない、闇を切り裂くような叫び声。この街はまた明日朝を迎え、こんな声など太陽に呑み込まれて消されるのだろう。いつその事、あたしもあの家も呑み込んでくれればいいのに。

「ねえ。」

肩を掴まれ、驚いて振り返ると髪を銀に染め、唇を白に塗った男がニヤニヤ笑っていた。歯がやけに黄色かった、

「あんた、可愛いじゃん。中学生？ 小学生？ ロリ顔だよなー。ただその服何？ ダイナシだよー、かわいいんだからさあ。」

何も答えないと、男は笑いながら胸を触ろうと手を伸ばしてきた。もちろんあたしは素早く避けた。生まれつきの敏捷性に感謝。

「金ならさあ、オレあるよ。」

あたしは逃げた。渋谷のセンター街を疾走した。また、どこから聞こえてくる奇声、笑い声。すべてを塞ぎ、黒い点となったあたしは目的もなく猛スピードで動く。

月までがあたしを笑っている気がした。今夜の月よ、どうかあたしを照らさないで。

オネガイ。

オレンジジュースをすする。気が付けば漫画喫茶に三時間。
 入った瞬間、そこに異次元の世界が広がったように思えた。店内はほぼ満席で、押し殺したような静けさが漂っていた。この静けさは、例えば図書館の静けさ等とは全然違うモノだ。
 何というか、ここであたしが殺されてもみんな漫画やパソコンの画面から、多分目を離さないと思えてくるのだ。ここには生気が皆無だ。あたしも他人事のように血を流して倒れる。そうすれば消える事は可能だろうか…そんな馬鹿らしい、少し前の自分ならすぐ否定していた妄想にあたしはとらわれ始める。だって現実感なんてまるでない。今、ここでパソコンいじっている事に。左腕をキーから離し、だらんと引力に任せてたらず。
 睡魔があたしを襲い始める。

あたしはゆらゆら揺れて浮いている。ここは上も下も右も左もない世界。嗚呼、あたしはやっと解放されたんだ。あれもこれもすべて悪夢だった。快感に酔いしれるあたしの前にノートが一冊、現れた。「妄想ノート」と太いマジックペンで書いてある。中を開いてみた。そこに一文『あたしはやっと解放されたんだ。』と書いてあって、そのページを破ってくしゃくしゃに丸めて投げる。

辺りは闇。ビロードのように暖かく、いらぬモノはすべて呑み込んでくれる。闇から浮かび上がるパソコン。あたしは泳ぐように手を伸ばし、「家族」「引きこもり」とキーワードを打って検索する。検索結果はもくもくとわきあがった雲に漫画の吹出しのように出てくる。スクロールしていくとあるBBSのメッセージで止まった。

「ボクが引きこもってしまったのは、もう学校も家も嫌になってしまったからです。学校ではいじめられ、家では争いあい罵り合うお父さんお母さんを見て、ボクはとても辛かったのです。」あたしは右足でそのメッセージの雲を蹴り飛ばした。雲は散り散りになって闇に呑まれていった。くだらない。そんな場面、ウチには一度だってなかったのに。あたしはモクモク雲を作り出し、メッセージを書き込んだ。

「あたしのおうちはとてもとても幸せな家庭でした。ただ、パパもママもあたしも気づかなかっただけなのです。家の片隅に、怪物が潜んでいた事に。」

闇の向こうにあたしの家が見える。嬉しくてすぐにすぐに玄関の扉を開けようとしたら、とんとんと肩を叩かれた。振り返ると「金ならさあ。オレあるよ。」と言う黄色い歯の男だった。もう、あたしはそんなもの怖くも何ともないのに。

「怖くない？ 本当に？」

男はぶくぶく膨れ上がって巨大化し、お姉ちゃんに変身した。左手にはそう、牛乳パック。あたしは家に逃げ込む。

「ママ、タスケテ。」

ママは笑顔で、鼻歌を歌いながらミシンを動かしている。そのママがアニメみたいにぺったんこになり、右手からミシンに縫われていく。ママ柄のソファカバー完成。家の外で、巨大化したお姉ちゃんはこの家を呑み込もうとしている。ソファカバーになったママも巨大化してお姉ちゃんを呑み込もうとしている。

「ネエネエネエ、二人トモ何ヤッテルノ？ アタシハココニイルヨ。アタシ、ハサマレテツブレチャウヨ。コワイヨタスケテ。」

声にならない叫びを上げた瞬間、家もお姉ちゃんもソファカバーもあたしも雲も闇もすべて、「妄想ノート」の中に吸い込まれて、パタンと閉じた。

「あの、お客様。」

誰かがあたしの肩を揺さぶっている。うっすら目を開けると、やる気ゼロの受付バイト君だった。

。「入店時間から八時間を越えていますので、一度ご清算頂くシステムになっているんですけど、いかがなさいますか？」

「あ、じゃあもう出ます。」

「はい…。」

彼は訝しげにあたしの事を見ている。あたしは素早く支度をし、お金を払って外に出た。

午前十時。もう街は夜の顔を脱ぎ捨てている。今日も殺人的に暑い。

この日を境に、あたしは二、三日に一度渋谷に出かけて行くようになった。ただでさえ、童顔のあたしが深夜までうろついていれば、面倒臭い事になるのは分かりきっていたので鎧をまとう事にした。それは簡単なことだった。髪を明るく染め、メイクを覚えた。その姿は嫌という程、渋谷の街に似合った。またママのお財布からお金を抜き取り、露出度の高い服を買ってそれを着た。（男に「ダイナシ」と言われた時、あたしは洗濯に失敗したTシャツにぼろい短パン姿だった。）

体中の水分が全部なくなる程、真昼のくそ暑いアスファルトの上を、足を引き摺って歩く。このうるさくて、ガキしかいないこの街が、今のあたしにとっては拠り所となっていた。それでいいのか等と自問自答してる余裕も、もしかしたらプライドさえもない。一步、また一步歩くごとに太陽があたしを突き刺す。その度、あたしは空っぽになっていく。振り返ってみても、ゆらゆら立ち上る陽炎の向こうにあのスクランブル交差点が見えるだけ。あたしの落としたモノ、失くしてしまったモノはきっと永遠に見る事さえできないのだ。

十代の汗は滝のよう流れ、あたしの頬、背中を伝う。アイスクリームのように体が溶けていく。

。また夜になってしまった。いつまでこんな事を続ければいい？ 誰に聞いてるんだあたし。UFOキャッチャーにもたれかかり、一日歩き通した足元を見つめる。少し向こうで、あたしと同じ年ぐらいの女子集団が騒いでいる。

あたしの視線が、その中の一人の女子に限定されていく。一番騒いでる端っこの女の子。あたしと同じ色の髪とメイク。

「ほら、上！ あっ、もおー。」

「貸してみ、やーだー、一回ぐらい、いいでしょー」

その声、その喋り方をあたしは忘れていなかった。でも随分遠いモノに感じて、ノスタルジーに浸っていた。苦くて苦しい、大人のコーヒーのような味が口の中に広がった。思わず目を閉じた。

「あやっぺ？」

目を開けると、津田ちゃんが大きく両手を振ってびよんびよん飛び跳ねていた。驚いた。気づいても絶対無視すると思っていたから。

津田ちゃんは金色の髪のポニーテールを揺らし、小麦色の足でこっちに走ってきた。

「何、一人？ メールしても全然返って来ないから、あたし心配してたんだよー、うー。」

泣き真似をしてあたしに抱きついてきた津田ちゃんからは、汗と香水の混じった匂いがした。

「ミズキー」

女子集団が津田ちゃんを呼んでいる。彼女達も、もちろん同じ様な鎧を身にまとっている。ウチのクラスの子は一人もいない。

「ちょっと待ってて。」

津田ちゃんは彼女達の所に行き少し話し、また戻ってきた。

「終業式も休んじゃってたじゃん？ あやっぺ。どうしたんだろってまなっちと言ってて。来週あたり奇襲攻撃かけよーか、なんて計画立ててたんだよ。突然お宅訪問、なんてね。」

終業式…そうか、お姉ちゃんのバタバタとママがおかしくなりそうで心配で、あたし行かなかったんだ。愛美にも、もう一ヶ月近く会ってない。

「ねえ津田ちゃん。」

「ん？」

「愛美は元気？」

「元気だよ。」

「あ、そう。」

津田ちゃんは少し笑った。

「そんな心配そうな顔しないでよ。まなっちは全然変わってないよ。黒髪のままだよ。」

ほっとして、何かが崩れてあたしはしゃがみ込んでしまった。耳に飛び込んでくるゲーム音が渦をまいて頭の中でこだましている。

「どうしたの？」

津田ちゃんもしゃがんだ。顔を上げるとアイプチで二重にした津田ちゃんの間が見えた。

「いい色に染まってるね、髪。」

津田ちゃんがあたしの頭を撫でる。

「でもあやっぺには似合っていない。ていうか何で？ あやっぺはあたしとは違う筈じゃん。何も変わらなくていいでしょ？ 何か変えたかったの？ 意外。」

津田ちゃんは何かを変えたかったんだろうか。そりゃそうか。全部かな？ クラスでのポジションも容姿も自分を取り巻くすべてのモノを捨てたかったのかな？

「津田ちゃんは変わったの？」

「そうなるといいけど、ならないと思う。この夏が終わるとまたみんな黒い髪に戻して、何食わぬ顔で学校に来て、一学期と同じ様な毎日が始まる。それはこの夏に何をしても、遊んでも、セックスしても変わらない。」

「津田ちゃんセックスしたの？」

津田ちゃんはあたしの顔を見て、にっと笑った。

「するのなんて簡単だよ。ねえ、場所移動しない？ 足痺れてきちゃった。」

適当に入ったカフェでまたあたしはオレンジジュースを飲んでいる。ストローで氷を回すとカラカラと涼しげな音がした。

「変な感じだね。」

アイスレモンティーを飲みながら、津田ちゃんが言った。

「二人とも一ヶ月ぶりぐらいに会ってさ、何にもお互いの事喋らずにお茶してる、この状況。」
そう言えば津田ちゃんはあたしのこの身なりについて何も聞いてこない。嫌と言う程聞かれると思ったのに。あたしも同じ鎧を身に着け、知らない女子と一緒にいた津田ちゃんの事、何も聞かない。話さない気がするからだ。例え、話したとしても今あたし達に必要なのはそんな事を語り合う事じゃない。

「だけど、本当にあやっぺ、その髪似合っていないよ。」

これは今まで聞いてきたどの津田ちゃんの言葉より正直な言葉だと思った。

パサパサの髪を自分で触ってみた。こんな髪とか、服とか靴も鞄も、何もいらなにのに、いらぬものばかりあたしは手に入れた。それは津田ちゃんですえ手に入れる事ができるモノなんだ。髪を撫でられたとき、津田ちゃんの手感触が暖かった。

「わかってるんだ、簡単に手に入るモノで何かを変えようなんて、虫が良すぎるよね。あやっぺ

。さっきも言ったけど、あたしは別に何かを期待してる訳じゃないんだよ。」

じゃあどうして？ と聞こうとして聞けなかった。あたしだって何もこの街に期待なんかしなくなつた。飛び出したきっかけは、「何か変わるかも」だったけど、そんな都合のいい何かは転がっていない事は、わかっていた気がする。

「ねえ、津田ちゃん。愛美と会ってる？」

「うーん、夏休みに入ってから二、三回会ったぐらいかな？」

「ねえ、マジでウチに来ようとしてたの？」

「うん。」

「本当に？」

「本当だよ。」

そうか。どうせわかってしまう事なんだ。秘密は暴かれる為にあるというのも、また真実。それなら、全部自分で壊してしまえばいい。結局あたし達は何もできない子供なんだ。

「ねえ、津田ちゃん。明日ウチに来て。」

「あ、本当？ 嬉しいな、あやっぺの方から誘ってくれるなんて。」

津田ちゃんは身を乗り出した。あたしをじっと見ている。

「それでね、お願いがあるの。」

「何？」

「…愛美は、連れて来ないで。」

「いいよ。」

何だかすべてをわかったように、津田ちゃんはすんなりとOKした。

少し、悔しかった。

「うわっ、すっげえ。」
前、ウチに来た時と同じ台詞を今日も津田ちゃんはやっぱり言った。もちろん全然違う意味で。
「すごいね、あやっぺ。」
掠れた声。津田ちゃん、毎晩渋谷で遊び歩いているのかな。
それにしても、とっちらかったこのリビング。積まれたゴミ袋。めくれ上がったカーペット。ずれたソファカバー。居るだけで退廃的な気分させてくれるこの部屋は、本当に渋谷の街とそっくりだ。
「ふーむ。あやっぺ、どこに座ればいいのかな？」
あたしは床に散乱している洗濯物を足で適当にどかした。
「ごめん、ここで。」
二人して、床にぺたんと座る。しばしの沈黙。
「ごめん、我慢してたんだけどさあ…あたしの性格知ってるよね、許して。先に謝っておく。」
カーペットを両手で叩いて津田ちゃんは顔を突き出してきた。
「ねえねえねえ何があったの？ どうしたのこのリビングは？」
あたしは、ちょっと笑いそうになった。髪を染めても、剥げたマニキュアを気にするけだるげな仕草を身に付けても、そのテンションはちっとも変わらない。何だかその事に安心したのだ。
「ちょっと、あやっぺ。あたし真剣なんだよ？」
「ごめんごめん、うーん…何から言えばいいのかなあ。」
津田ちゃんも愛美も、一学期にそれぞれ秘密を打ち明けてくれた。（津田ちゃんの場合は一種の事故だったけど）あたしは、友達に秘密を打ち明けるという経験をした事がない事に気づいた。全く秘密を持たなかったか、またはその秘密に自分ですら気づかなかったか。とにかく初めての事なので何だかすごく緊張してしまった。
「えっと…」
あたしが話し出そうとしたら、カチャリ、とリビングの戸が開いた。あたしの表情が凍りつく。のっそりとそれは登場した。指を折って数えてみる。一週間ぶりにお姉ちゃんが一階に降りてきた姿を見た。
もともととでかかった体が引きこもり生活に入ってから一・五倍の大きさに膨れ上がり、お風呂にも入っていないので強烈な汗臭さを辺りに振りまきながら、お姉ちゃんはあたしに近寄り、一枚の紙切れを渡した。何だかもう受け取るのも嫌だ。
「無理。今友達来てるじゃん。見ればわかるでしょ。」
あたしはそう言いながらママを探した。カウンターキッチンでいつものように座っているママが見えた。上を向いて、口をぽかんと開けている。
「ママ。」
呼んでみたけど、応答なし。使い物にならない。
「ねえ、私はアンタに頼んでるんだけど。」
「だから無理だってば。」
「ふーん。」
お姉ちゃんは、とりあえずテーブルの上のコップを壁に投げる。当然、派手な音がして壊れる。さすがに津田ちゃんの体が固まった。あたしはもう慣れてしまった。こんな状況がたまらなくて、あたしは渋谷に逃げ出したのだ。カウンターの中のママが絶叫する。
「やめてーっ！」
その直後の、うざったい静寂。
「あれ、あたしのお姉ちゃん。あたしお姉ちゃんいたんだよ。ゴジラみたいじゃない？ ねえ、そう思わない？ 津田ちゃん。」
あたしは白い天井を見上げて言った。

「コクと旨みのチキンカレー、梅ちりめんご飯弁当、わかめと玉葱のシャキシャキサラダ、いなり寿司五個パック、アメリカンホットドッグ…。」

津田ちゃんはあたしの手をとり、紙切れに書かれた単語をとつとつと読み上げている。

「久しぶりだったのに、その挨拶はないでしょう、お姉ちゃん。」

あたしを無視してお姉ちゃんはキッチンの方へ向かう。黄ばんだTシャツの首元を引っ張りながら冷蔵庫を開ける。当然、中身は空っぽだ。

「ねえ涼子さん主婦だよねえ？ 本にも出たカリスマ主婦だよねえ？ なーんで食べ物何にもないんですかあ？ そう言えば、このご自慢のリビング、やけに汚いんですけど、気のせいですか？」

お姉ちゃんはママの首を絞めながらゆらゆらと揺らす。ママの顔はどんどん生気を失って白くなっていった。頭の中を空っぽにする事に慣れたあたしには綺麗だとすら思える、ママの白い顔。喜々とした、お姉ちゃんの醜い顔。

「あー疲れた。どいつもこいつも使えねーなあ。」

お姉ちゃんはママの首から手を離し、Tシャツの中に手を突っ込んで背中をぼりぼりと搔いた。ママの顔に生気が戻ってきて、はあはあと肩で呼吸をしながら倒れる。あたしはキッチンの中に入って背中をさすり、またママを椅子に座らせてあげる。

「ごめん、津田ちゃん。」

カウンター越しにあたしは叫ぶ。自分でも何を謝っているのかよくわからなかった。

「あの、上手く表現できないけど、ウチ今こうなんだよ。少し前とは全然違っちゃってさ、その、どう言えばいいのかわからないんだけど本当に。」

「あやっぺ、この紙に書いてるものってさ、これ買ってくればいいのか？」

津田ちゃんは立ち上がって出かけようとしている。

「え？」

あたしは固まってしまった。津田ちゃん、アンタ何しようとしてるの？

「その人、これを欲しがってるんでしょ？ いいよ、あたしが買ってくる。」

素早くリビング、廊下を走りぬけ、開いてすぐ閉じられた玄関。

ぴんと来た。津田ちゃんはもう戻って来ない。パパに続いて、またあたしの前から人が一人消えた。予想はついてた。こうするために、あたしは今日津田ちゃんをウチに呼んだのかもしれない。あたしの望んだように秘密は暴かれていく。津田ちゃんは誰に話すだろう、変にわくわくしている自分がいた。

新学期にはウチのクラスで下克上が起きているだろう。あたしの頭の中で「妄想ノート」が開かれた。

津田ちゃんは今日の事をクラスのB、Cランク組の奴等に話す。

「あの子んち、ヤバイんだ。」

「頭はいいのにね。」

「かわいそうだね。」

「うん、かわいそう。」

同情の名の下に結託した、クラスのほとんどの女子があたしをチラチラ見て、囁き合う。あたしは机にかじりついて、一人ずつ女子の顔を思い浮かべていき、頭の中で血塗れになるぐらいに殴る。休み時間になる度、あたしはそんなくだらな一人遊びを繰り返す。

愛美。君はどうするんだろう。この一点があたしの妄想を拒絶している。君が理想だと言ってくれた家庭は嘘だった。ごめんなさい。でも一緒にいたい。いや、やっぱりみんなと同じ様にあたしを笑って欲しい。矛盾した二つの想いが交差する。あたしと一緒にいれば、愛美は「かわいそうな子と一緒にいる子」になってしまう。君だけは汚したくない存在なのに。あたし自身が君を汚している。

「ただいま！」

あたしの妄想が途切れた。

「いやー、あっちーの何のって。ここ、コンビニまで意外と遠いね。メイクが台無しだよおー。」

大きなビニール袋を二つぶら下げ、津田ちゃんはニコニコしてあたしに話しかける。

「なーに、あやっぺ。そんなびっくりした顔で見ないでくれる？」

津田ちゃんは袋から、お弁当、サンドイッチ、お菓子等を次々と取り出し、お姉ちゃんの前に並べた。

「はい、これどうぞ。」

「……。」

お姉ちゃんは手を伸ばそうとしない。

「あれ？ 食べたかったんじゃないの？」

「津田ちゃん。」

たまらなくなってきたあたしは言った。

「何でこんな事するの？」

「あやっぺ、じゃあ何であたしだけを今日呼んだの？ まなっちじゃなくてあたしを。」

逆に聞き返されてしまった。

「事情はよくわからないけど、あやっぺがあたしを必要としてくれた事が、あたしは単純に嬉しかったから。で、このウチに来てみて、とりあえずあやっぺは困ってるんだと思った。優しさとかそういうのとは違う感情で、役に立ちたいと思った。そうすれば、あたし少しは、あやっぺやまなっちに近づけるかもしれないでしょ？ こんな、髪染めたり、マニキュア塗ったりして急に変わろうとしなくてもいいのならあたしは…あたしは何だってするよ。」

何だってするんだ。」

「うるさい！」

お姉ちゃんが大声を出す。

「勝手な事を、し、しないで欲しい。私は、コイツに買わせたかったんだ。」

顎をしゃくってあたしを指す。

「誰が買っても同じモノじゃない。価値が変わるの？」

「行かせる事に、か、価値があるんだ。」

「もうやめて、もういいよ津田ちゃん。」

あたしはすべてを吐き出したくなった。

「別に津田ちゃんに何かを期待した訳じゃないよ。もうすべて壊したかった。こんな格好のあたしを見られたのも何かの運命だとも思ったし。何も変えようとしてくれなくていい。愛美と呼ばなかったのは…ていうか呼べなかったのは、まだ少しだけあるプライド。」（そして愛美の『理想の家』の幻想を壊したくなかったから）と胸の中で付け加えた。

「じゃあ誰でも良かったの？ まなっち以外なら。」

「そうかもね…うん、そうだよ。」

怒るなら怒ってもいいし、帰るなら帰ってもいい。もう本当に何もかもどうでもいい気分になって、あたしは目を閉じた。

「それなら別にいいんだよね、その『誰か』が津田瑞希でも。」

「え？」

「そういうポジションには慣れてるもん。そもそもあたしの人生、それ以外の位置にいた事ってあったかなあ？ 期待されてるなんて思い上がりはないよ、あたしの中に。」

ねえ知ってた？ あたしは、あやっぺが大好きなんだよ。」

津田ちゃんはお姉ちゃんの方に向き直って宣言した。

「だから、あやっぺを泣かすような、そんな人許せないから。」

自分の頬に手を当てると、温かい液体が流れていた。一度目は隠せたけど、今度はもう誤魔化せなかった。

「あやっぺのお姉さんですよ。改めましてのはじめまして。津田瑞希と申します。」

変な挨拶をして、津田ちゃんは床に広げたお弁当を一個手に取った。

「こだわりの手延べそうめん。これ、おいしそうですね。食べないんですか？」

「何者だよ、あ。アンタは。」

お姉ちゃんの声が震えている。怒りで震えてるんじゃない。家族以外の人間と口を利くのが久しぶりだからだ。

こんなお姉ちゃんを見るのは引きこもって以来初めてだ。あの、いつものお姉ちゃんだ。おどおどして、小さな目だけきょろきょろさせている、あのお姉ちゃんが帰ってきた。とっくに涙など乾いたあたしはわくわくした気分になった。思い出せ、あの頃。甦れ、マイ・スイート・ホーム。

「人の、家の事に、口出し、するな。」

お姉ちゃんのはあはあと苦しうに喋っている。

「うーん、できればしたくないけど見ちゃいましたから。あたしって特にいい奴でも何でもなくて、単純に物好きなんです。ちよっと、もうこのまま帰ったら眠れなくなっちゃいそうなんです。」

名前、何ていうんですか？ あたしが『お姉さん』って呼ぶのも変ですよな。」

「名前…。」

「楓夏だよな、お姉ちゃん。」

あたしが教えてあげた。

「ふうか？ どんな字？」

「カエデって言う字わかる？ カエデに夏で、楓夏。」

「へー、それでふうかって読むんだ。素敵な名前ですね！」

津田ちゃんが笑いかけると、お姉ちゃんのはあしだけを見て、声を荒げた。

「アンタ何楽しそうにしてんだよっ！」

あたしの肩を掴もうとするその手をひよいとかわした。そう、このリズム。思い出してきた。

「ねえお姉ちゃん。結局お姉ちゃんってあたしかママにしか暴力ふるえないんだよねえ。つまり、やっぱりここにしか、この家にしかお姉ちゃん居られないんだよ。面白かった？ この一ヶ月。食べたいだけ食べて寝たいだけ寝て。ねえ、もうそろそろこんな遊びは終わりにしない？ ママもあたしも疲れてるんだしさあ。ひょっこりパパも帰ってくるかもしれないよ。あ、パパがいなくなった事に気づいてないか。いらない？ あはは。」

「遊びなんかじゃないっ！ これは私の…私の…。」

お姉ちゃんのは下を向きぼそぼそ何か呟いている。

あたしの耳元で津田ちゃんが囁いた。

「ねえ、楓夏さんっていつもこんなに食べてたの？」

「うん、もういつもこんな風にちっちゃい紙にびっしり食べ物書いてあんの。お陰であたしコンビニマニアだよ。」

「楓夏さん。どんなに食べても何かを欲しがってもいいけど、それで何か変わるなんて期待しちゃ駄目ですよ。」

妙に自信たっぷりに津田ちゃんは言った。

「そんな事…わからない。」

「わかりますよ！ あたしも変わりがたくてS女子中入ったんですから。いじめられてて。ま、それはいいんですけどね。だから、あたし楓夏さんと友達になれるかなって思うんですけど。」

…津田ちゃん、ギャグそれ？

「私、いじめられてそうに、見えるのか？」

「正直、見えます。」

「か、勝手にかわいそうぶって、そんな事を、言うな。」

「だって思っちゃったんだもん。それに楓夏さんがかわいそうなら、あたしだってかわいそうって事になるじゃないですか。あたし、自分で自分の事そんな風に思う程、自意識過剰じゃないつもりなんですけど。」

「い、一緒にするな。」

「お友達になってあげてちょうだい！」

突然、キッチンの方から声がした。ママだ。ゆらりと立ち上がり、散らかるゴミを掻き分けこっちにやって来る。

「この子、ちよっとおかしくなっちゃったんです。だからお友達さえいれば元どおりに直ると思うんです。お姉ちゃんをよろしくお願いします。この通りです。」

ママは涙まで流して津田ちゃんの前で土下座した。

ママ、さすが。魂まで死んではいなかったんだね。そう、ここはママの「夢の場所」だもんね。簡単にこの家を死なせる訳にはいかないよね。そのためなら何でもするよね。

「お、おばさん。」

さすがにこれは想定外だったか、津田ちゃんは笑い出してしまった。

この場を何とかする事で、津田ちゃんのはあしの隣に居たいと思っている。ママは、「家族の再生」を願う事で、この家に居たいと思っている。あたしは今、どこに居たいと思っている？ 一度はすべて諦めて投げ捨ててしまった現実。けど状況はくるくると変わり、その現実の形を変えて今あたしの前に放り出されてある。

それならばあたしは？

それは突然だった。お姉ちゃんが逃げた。リビングを抜け、階段を上がり、またあの「闇」の元へと急いでいる。津田ちゃんが叫ぶ。
「あっ、駄目ですっ！ さあ、あやっぺ、おばさん、追いかけてしょう！」
「はい！」
コントのような津田ちゃんの号令であたし達三人は猛ダッシュで階段を駆け上がった。その扉が閉められる寸前。あたし達三人は力ずくで「闇」に介入する事に成功した。

ついに「闇」があたし達の前にその姿を現した。
積まれた空の弁当箱。十袋はあるポテトチップスの空袋。重ねられた、洗ってない下着の山。ティッシュの山。それらすべてが吐き気をもよおす程の悪臭を放ち、床を埋め尽くしていた。ベッドのシーツは茶色く変色し、その上の窓が開いていて、桃色のカーテンが疎ましくひらひらはためている。めくられていないカレンダー、上に埃の積もった教科書。もはやこの部屋が死んでいるのかどうかすらあたしにはわからない。がん細胞としては正しい姿なのかもしれない。

お姉ちゃんは観念したように目を見開いたまま、部屋の隅っこに寝転がっていた。それはまるで死体のようだった。

「お姉ちゃん、しっかりして！」

ママが泣きながらお姉ちゃんの体を揺さぶる。お姉ちゃん是一言も言葉を発する事なく、ぴくりとも動かない。

「あやっぺ、足元。」

「ん？」

津田ちゃんに言われ、下を向くと一冊のノートをあたしの右足が踏んでいた。その表紙には太いマジックペンで「神様ノート」と書かれていた。あたしは中を開いてみた。

「○月△日

お月様。

私のいる所には光しか届かないんですケド、今日もキレイに輝いているコトでしょう。

聞いて下さい。

今度、私のおウチは、お引っ越しをするみたいなんデス。
でも、チョットいろいろあるみたいで、ウフ、もめてるんデス。

いつもお話しているように。
私は秘かにこのおウチがバラバラになるコトを望んでいます。

そんなコトは。
もちろん口にはデキマセン。

だから。
お月様。

あなたにだけ、伝えます。

二段ベッドの上。
大キライな妹が寝ています。

私。
知ってるんデス。

妹がいつも私を見て
ゲンコツ作ってるコト。

でも、私。
いつだって準備オツケーなんデス。

後は。
時が満ちるのを待つだけデス。

それまで。
アア、どうか。
お月様だけは。

お月様だけは、私のコト
ズット見ていてクダサイ。

私がココニイルコト。

知っていて欲しいのデス。

オヤスミナサイ。
お月様。」

「×月△日

離婚はダメでした。

やっぱりそんなに
世の中は甘くないデス。

テヘ★

新しいこのおウチからだ
あなたがよく見えます。

ちゃんと見つけてクダサイネ。
私を。

信じています。

お月様。」

「△月△日

アア。
もう耐えられません。

このイマワシイおウチが
『幸せな家』として
本に載る、みたいデス。

あの、ミシンの音。
そう。
いつも私が
耳を塞いで耐えている
呪いのあのリズムが。

ついに。
このおウチを
支配しようとしているんデス。

こんな悲惨なコトが
あっていいのデショウカ？

ねえ。
お月様。

もうイイデスヨネ？
時は満ちたのデス。

始まりの日が来たと

今。ココに誓いマス。」

「×月×日

お月様。
快感デス。

ヤツラは面白い程に

私の手足となって
動いてくれます。

私。
何を今まで我慢していたのでしょうか。

私の中の。
ありとあらゆる欲望を。
ハジメテ。
生まれてハジメテ
全部吐き出してミタイ。
と
思います。

十五年間生きてきて
今一番。

幸せデス。

ありがとうございます。

お月様。

信じてきて
本当にヨカッタ。

生きてきて

本当に

ヨカッタ。

お月様

お月様

お月様。」

ノートはそこで終わっていた。

あたしの中に大切にしまわれていた、ある休日の光景―「パーフェクト・ホーム」や、おいしいホットミルク。おどおどしたお姉ちゃんの顔、引っ越しの日のママのベストテン第一位の笑顔なんかが、全部粉々に砕け散っていった。喪失した。捨てた筈の「月」までもが一瞬復活し、邪悪な笑顔を見せてまたいなくなってしまった。

永遠に、いなくなってしまった。

何故、自分だけの月だなんて思えたのだろう。

魔法だとか大それた事を言って、子供っぽいと馬鹿にしながら、何で結局は信じていられたのだろう。

こんなに近くで、正反対の事を同じ思考回路で考えていた人物がいたなんて。それが…お姉ちゃんだったなんて。

あたしは馬鹿だ。本当にバカだ。でも、もうこの愚かさを笑ってくれる何かすら、あたしは持っていない。本当のカラッポだ。渋谷の街で中身をカラッポにできたと思っていたけど、あれは錯覚だった。いつも深夜まであてもなく歩き、失くしていこうとする自分というものをまだ持っていた。月にこんな自分を笑って欲しいと、甘ったれた願いを込めて。

ノートを読み終えた津田ちゃんは、
「ふーん、こんなメルヘンチックな事書いてたんだね。」
と驚いていた。

「お月様だって、カワイイじゃない。やっぱり友達になりたいなあ、楓夏さん、楓夏ちゃん、いや、ふーちゃんだな。」
一人でうんうんと頷いている。

ママは叫び続けている。

お姉ちゃんは動かない。

「あ、まだ何も書いてないノートがあったよ。あやっぺも何か書いてみたら？　くだらないって思っちゃうかもしれないけど、あやっぺなら。」
津田ちゃんに手渡されたノートの中には、真っ白な世界が広がっていた。今のあたしのように、何もない場所がそこにあった。

その辺にあったペンで、あたしがそこに描こうとしたモノは。

愛美だった。愛美の顔を思い出そうとしてみた。一ヶ月も会ってないけど、細かい所、目元の小さなほくろの位置まであたしは鮮明に思い出す事ができた。けど、今のあたしは、そこにどんなに上手く愛美を描いても、それがあたしの中の愛美のイメージとぴったり重なったとしても、それは本当の愛美じゃない事を知っていた。

それでも愛美を必要だと思えるか？　これからのあたしの行く所、居る所はきっとその答えに懸かっている。あたしの中の汚れなき存在、愛美。

「どったのあやっぺ？　何にも書いてないじゃん。やっぱりあやっぺには書く事なんかないか。じゃあ、あたしが書いていい？」

津田ちゃんが横から覗き込む。

「津田ちゃん何書くの。」

「そうだなあ…あたしとふーちゃん友達になろう大作戦の計画。」

「バーカ。」

あたしはノートを床に投げ捨てた。

まだ叫び続けているママと動かないお姉ちゃんにちらりと目をやり、強い光が差し込んでいる窓に目を移した。

「バカとは何だよー、言ったでしょー？　あたしはあやっぺの事が…」

「大好きなんですよ。知ってるよ、ちゃんと。」

そう言いながら窓に近づいて行って外を見た。

愛美が立っていた。

本物の瀬野愛美だ。あたしの大好きな黒髪、あの真面目顔で。

彼女はそこに居た。

あたしは愛美に大きく手を振った。

夏の太陽が、あたし達を照らしていた。

—了—